日本英文学会東北支部
第69回大会資料
共催：国立大学法人　弘前大学

時：2014年11月29日（土）・30日（日）

所：弘前大学　創立50周年記念会館
（青森県弘前市文京町1番地）

日本英文学会東北支部事務局

（〒980-8511　仙台市青葉区土樋一丁目3-1　東北学院大学英語英文学研究所内）
電話：022-264-6401／ファクス：022-264-6530

第69回大会懇親会のご案内

第69回大会懇親会を以下のように開催致します。詳細および申し込みについては、10月に支部会員宛に別送する案内をご覧下さい。

【日時】 2014年11月29日（土） 午後6時～8時

【場所】 ベストウエスタンホテルニューシティ弘前 12階 スカイバンケット
（弘前市大町1丁目1番地2号）

日本英文学会東北支部

2014年度 大会役員一覧

（敬称略・五十音順）

支部長	箭川 修				
副支部長	佐々木 和貴				
理事	飯田 清志	石橋 敬太郎	岩田 美喜	宇津 まり子	
	遠藤 健一	大河内 昌	大西 洋一	奥野 浩子	
	金子 義明	川田 潤	鈴木 亨	鈴木 雅之	村上 東
大会準備委員	古河 美喜子	竹森 徹士	飯田 清志	山田 恵	
	ルプシャ・コルネリア・ダニエラ		長野 明子		
開催校委員	奥野 浩子				
事務局	福士 航（事務局長）		井出 達郎（事務局員）		

日本英文学会東北支部第69回大会プログラム
共催：国立大学法人 弘前大学

時：2014年11月29日（土）・30日（日）
所：弘前大学　創立50周年記念会館
（青森県弘前市文京町1番地）

第一日　11月29日（土）

理事会　午前11時より（会議室3・4）
開会式　午後 2 時より（岩木ホール）
□開会の辞　日本英文学会東北支部長　箭川　修
□共催の挨拶　大会準備委員開催校委員　奥野浩子

研究発表　第1発表　14：30 − 15：05　第2発表　15：10 − 15：45
第3発表　15：50 − 16：25　第4発表　16：30 − 17：05

第一室（岩木ホール）

司会　秋田大学教授　佐々木和貴
1. シェイクスピアにおける占星術概念の概念史的意義について
弘前大学教授　田中一隆

司会　宮城学院女子大学特任教授　鈴木雅之
2. J. オースティン『賛美歌祈祷集』(1668) の表現のシンプリシティ
明治大学准教授　樋渡さゆり

司会　尚絅学院大学教授　小原俊文
3. T. S. エリオット詩におけるインデックスの詩学
東北大学大学院　米澤光也

司会　弘前大学准教授　小野寺進
4. *Tess of the d'Urbervilles* における小説制度という運命
東北大学大学院　原雅樹

第二室（会議室2）

司会　岩手大学教授　齋藤博次
1. ロック、ナショナリズム、文化資本
秋田大学教授　村上東
2. キングストンの『アメリカの中国人』に見られる「関公」表象
東北大学大学院　王偉

司会　流通経済大学講師　野口元康
3. “leaving” という出来事——J. D. サリンジャー作品における痕跡の存在論
東北学院大学准教授　井出達郎

4. 自由という神話――『ティファニーで朝食を』にみる冷戦期アメリカ
東北大学大学院　徳　永　慎　也

第三室（会議室1）
司会　盛岡大学准教授　新　沼　史　和

1. 否定数量詞の空演算子移動分析
東北大学大学院　中　島　崇　法
2. 創造的逸脱表現の認可をめぐって――Think differentの構文分析
山形大学教授　鈴　木　　亨

司会　秋田大学教授　村　上　　東

3. Kate Chopinの黒人表象と“Désirée's Baby”の特殊性
山形県立米沢女子短期大学准教授　宇　津　まり子
4. “That Evening Sun”再読
東京都立産業技術高専准教授　海　上　順　代

第二日　11月30日（日）

SYMPOSIA（10：00－13：00）

第一部門（岩木ホール）
オリジナルとアダプテーション

司会・講師	秋田高専講師	古　河　美喜子
講師	弘前大学講師	土　井　雅　之
講師	山形大学教授	中　村　　隆
講師	二葉栄養専門学校講師	吉　田　季実子

第二部門（会議室2）
アメリカ史へ遡行するファンタジー：新たな読みの試み

司会・講師	福島大学教授	後　藤　史　子
講師	東北学院大学非常勤講師	宮　澤　文　雄
講師	流通経済大学講師	野　口　元　康
講師	福島大学非常勤講師	渡　邊　真由美
講師	東北学院大学非常勤講師	星　　かおり

第三部門（会議室1）
文法から見た語用論・語用論から見た文法

司会・講師	群馬県立女子大学講師	志　澤　　剛
講師	筑波大学大学院	五十嵐　啓　太
講師	中京大学講師	三　上　　傑
講師	東北大学准教授	長　野　明　子

＜第一日＞

11月29日（土）14時30分

研　究　発　表

第一室（岩木ホール）

司会　秋田大学教授　佐々木　和　貴

シェイクスピアにおける占星術概念の概念史的意義について

弘前大学教授　田　中　一　隆

本発表では、シェイクスピアを中心とする英国初期近代の文献に現れた占星術概念について概念史研究の観点から分析することによって、シェイクスピアに現れる占星術概念の概念史的な意義について考察することを目的とする。具体的には、『リア王』に現れる “goatish disposition” の表現に着目し、この表現が当時「好色な性質」と「山羊座の配置」という二つの意味を同時に持ち得た可能性を探りたい。さらに、*disposition* 以外の占星術概念を取り上げて、同様に概念史的な考察を加えることによって、シェイクスピアと彼の同時代の著作家たちの占星術概念の扱い方の違いについて、興味深い事実を明らかにしたい。

司会　宮城学院女子大学特任教授　鈴　木　雅　之

J. オースティン『賛美歌祈祷集』（1668）の表現のシンプリシティ

明治大学准教授　樋　渡　さゆり

ジョン・オースティン（John Austin, FRS, 1613-69）による『賛美歌祈祷集』（*Devotions in the Ancient Way of Offices*,1668）は、王政復古時代に「平信徒」すなわち「ふつうの人々」のために英語で書き下ろされた最初の賛美歌集である。著者のカトリック改宗により、詩テクストは英国国教会用に改定・編集されて版を重ねている。民謡収集などの好古趣味やヒムノディーの隆盛をみたロマン主義時代には「効果的なシンプリシティゆえに、長く英語の模範であり続けた」（1789年序文）と評価されているが、これまでほとんど論じられることはなかった。20世紀には作曲家・民謡収集家のR. ヴォーン・ウィリアムズ（1930）がオースティンのテクストと『英国国教会祈祷書』（1662）を組み合わせて合唱曲の歌詞にしている。本発表では、賛美歌や瞑想の詩テクストを文学テクストと考えて、テクスト分析と出版事情などから考察する。王立協会が提唱した「言語のシンプリシティ」への志向がロマン主義時代に再び表れる過程をインターテクスチュアルな問題としてとらえ、再構築を試みる。

司会　尚絅学院大学教授　小　原　俊　文

T. S. エリオット詩におけるインデックスの詩学

東北大学大学院　米　澤　光　也

『荒地』出版100周年を目前に控え、T. S. エリオットの新たな資料が相次いで出版されてきている。こういった資料から大きな恩恵をうけているのが主に文化研究や精神分析批評である。ところで、こうした研究は詩テクストと詩人の個人的な資料の照会に終始しがちであり、一部のよくできた批評をのぞいて、必ずしも詩の解釈を豊かにするものとは言えない。しかし、こうした詩と資料の照会を促している要素はむしろエリオットの詩が含むレトリカルな要因による。それはこの詩が出版当初から変わらずはらんでいるインデックス的な性質であるように思われる。本発表は、エリオット詩に見られる指標的レトリックを額面通りに受け取るのではなく、むしろ指標とその指示対象の間にあって間接的に演出される一種の距離感を『荒地』を中心として考察していくものである。

司会　弘前大学准教授　小野寺　　進

Tess of the d'Urbervilles における小説制度という運命

東北大学大学院　原　　雅　樹

Thomas Hardyの代表作、*Tess of the d'Urbervilles: A Pure Woman Faithfully Presented by Thomas Hardy* (1891) を特徴づけるのが、運命論あるいは決定論の問題であることは、これまでに繰り返し論じられてきた。本発表は、『テス』において描かれる運命を、これまでの研究がおこなってきたように思想史や悲劇の文脈で捉えるのではなく、近代の問題として考察する試みである。その結果、運命というのは、不安定な市場経済とそれを無害化する家庭という二重構造からなる近代社会と、その形成に貢献した小説制度を表していることが見えてくる。『テス』の副題に示されている通り、ハーディは、Alecに強姦され処女性を失いAngelと家庭を築くことができなかったテスの純粋無垢を主張している。むろん、近代的な小説の制度はそれを積極的に描くことを彼に許さない。しかし、テスの純粋性は表象の彼方にある何かとして、絶えず読者につきまとうことになる。『テス』が示しているのは、純粋性は表象不可能であるという逆説なのである。

第二室（会議室2）

司会　岩手大学教授　齋　藤　博　次

ロック、ナショナリズム、文化資本

秋田大学教授　村　上　　東

Simon and Garfunkel の "America" では、若いふたりがグレイハンド・バスに乗ってアメリカを探

しても、明確な答えはない。右寄りの答えも左寄りの答えも出さないことで安全なリベラル派の作品となっているが、ナショナリズム娯楽という側面を備えている。James Fenimore Cooper や Scott Fitzgerald といったナショナリズム娯楽の騎手がページを飾るのが合州国の文学史である。合州国を代表する交響曲はおそらく Charles Ives の作品だろうが、これもナショナリズム抜きには語れない。ロックなどの音楽でも Chuck Berry をはじめとしてナショナリズム娯楽の達人が目白押しである。合州国の文学史からナショナリズムを抜き取ったら何が残るのか、ナショナリズムに批判的な作家達の苦闘に何らかの意味があるのか、を私は考えてきたが、ロックやブルーズなどの対抗文化音楽の文化資本化が本格的に進む現在、自分の問題意識を音楽の分野へも適用し、文化とナショナリズムの問題を新たな視点で見直したいのである。

キングストンの『アメリカの中国人』に見られる「関公」表象

東北大学大学院　王　偉

マキシーン・ホン・キングストン（Maxine Hong Kingston, 1944-）の第二作目の作品『アメリカの中国人』（*China Men*, 1980）は中国系アメリカ人男性の年代記とも言うべき作品である。各章では、中国系アメリカ人である語り手の「わたし」によって、曾祖父、父方の祖父、母方の祖父、伯父、父、弟の世代の中国系男性達の苦闘の歴史が語られる。各章の間には中国の伝説、神話、小話、アメリカの移民政策文書、新聞記事等が挿入されている。この作品には、『三国志演義』（*Romance of the Three Kingdoms*）に描かれている英雄「関公」（関羽、Kuan Goong）に関する言及や挿話が見受けられる。本発表では、最初に『アメリカの中国人』において中国の英雄「関公」がいかに表象されているのかを考察し、次にキングストンのこの作品における意図を探りたい。

司会　流通経済大学講師　野口元康

“leaving” という出来事――J. D. サリンジャー作品における痕跡の存在論

東北学院大学准教授　井出達郎

本発表は、J. D. サリンジャーの三つの作品――*Franny and Zooey*（1961）、“For Esmé—with Love and Squalor”（1950）、*The Catcher in the Rye*（1951）――を取り上げ、*Franny and Zooey* の登場人物であるフラニーの発する “leave” という言葉が、サリンジャー作品が描く特異な痕跡の存在論というべきものにつながっていくことを論じる。フラニーが理想の詩人を説明するときに使うこの “leave” という言葉は、フラニーがそこで言うように、何かを「残す」といういわば存在を生み出す出来事を意味する一方で、同時に、その何かから「立ち去る」という不在の出来事をも意味することができる。「立ち去る」という不在の出来事が「残す」という存在の出来事と不可避に関わっていること、サリンジャーの作品群は、“leave” のもつこの二重の意味と重なりながら、立ち去ることで残される存在、すなわち、痕跡という存在を描き続けている。

自由という神話――『ティファニーで朝食を』にみる冷戦期アメリカ

東北大学大学院　徳　永　慎　也

トルーマン・カポーティの『ティファニーで朝食を』(1958) は、第二次世界大戦中であった1943年から1945年にかけてのホリー・ゴライトリーと語り手「僕」の思い出を、冷戦期1957年頃において「僕」が語る物語である。本発表では、ホリーがティファニーに見る夢とアメリカ消費社会を象徴するティファニーという夢には相違があることを論じる。また、そこから作家カポーティの社会的政治的意識を考察する。

すなわち、ホリーが自由と安寧をアメリカ消費社会に求めるものの、抑圧的なアメリカ社会において、彼女が娼婦、嘘つき、精神病者ととらえられ、最後には犯罪者となり、アメリカを去っていく姿を明らかにする。アメリカ消費社会が魅せたティファニーという夢は神話だったのである。しかし、物語は終わらない。ホリーは自由と安寧を求めて南米へ向かい、アフリカに渡ったと推測される。ここに、作家カポーティが真の自由と平等を求める姿を考察する。

第三室（会議室1）

司会　盛岡大学准教授　新　沼　史　和

否定数量詞の空演算子移動分析

東北大学大学院　中　島　崇　法

no, few, little等の否定数量詞（以下NQ）が生起した文の極性は否定に指定される。本発表では、否定極性の決定はNQを含む名詞句から空演算子が移動することによりなされると提案する。この分析は、NQの分布が移動の諸制約に従うことから支持される。先ず、NQが等位接続制約に従うことを指摘する。具体的には、等位項の一方にのみ生起したNQは等位接続制約により文を否定に指定しない一方、等位項の両方に生起したNQは全域的適用により文を否定に指定することを観察し、移動分析への支持を与える。更に、補部･付加部に生起したNQが摘出領域条件に従うことを示し、移動分析への更なる支持を与える。また、Zeijlstra 2004などによる否定の機能投射とNQとのAgree分析は上記の事実を誤って予測することを示し、本分析はAgree分析よりも妥当であると論じる。

創造的逸脱表現の認可をめぐって――Think differentの構文分析

山形大学教授　鈴　木　　亨

Apple社の宣伝文句“Think different.”を言語学的に分析することにより、文法が創造的逸脱表現を認可するしくみについて考える。可能性として、(A) 形容詞に後続する目的語の省略、(B) 動詞と形容詞を組み合わせた構文解釈、(C) 形容詞の副詞的解釈という3つの分析を検討するが、いずれも当該表現の説明としては不十分であることを示す。関連表現として、動詞thinkが抽象名詞を目的語とする事例（Think victory./Think beauty.）、活動動詞と形容詞を組み合わせた標語表現（Start

small./Vote green.)、再帰代名詞を伴う結果構文(Eat yourself slim./Think yourself happy.)を比較分析し、文法的には逸脱的である“Think different.”という表現が容認されるために複合的要因が存在することを論じる。

司会　秋田大学教授　村　上　　東

Kate Chopinの黒人表象と“Désirée's Baby”の特殊性

山形県立米沢女子短期大学准教授　宇　津　まり子

南北戦争後の激動期を南部ルイジアナで過ごしたにも関わらず、Kate Chopinは作品において人種問題に直接取り組むことはほぼなかった――と、伝記作家Per Seyerstedは評価している。しかし、黒人が登場するショパン作品の数は多く、Emily Tothは人種的ステレオタイプを文学的コンベンションの一つとして捉えた上で、ショパンがそれを多用していることを指摘している。Nina Baymによれば、南北戦争直後には黒人たち、世紀末に近づくにつれて女たちが、旧南部神話形成の動きの中、文学に盛んに用いられたという。ステレオタイプの利用は、神話形成の一躍を担うという意味で実に政治的な行為であり、本発表では、黒人人物が中心的あるいは重要な役割を果たしている作品を検証することで、ショパンの黒人表象の特徴を輪郭づけ、このような作品群の中で“Désirée's Baby”がいかに特殊な作品となっているかを示したい。

“That Evening Sun”再読

東京都立産業技術高専准教授　海　上　順　代

William Faulknerの“That Evening Sun”を、NancyのJesusへの恐怖を中心的なテーマとして再読した。多くの論文でNancyのJesusへの恐怖について論じられてきたが、Nancyの恐怖がJesusに堕胎される恐怖、堕胎の結果死に至るかもしれない恐怖であるという先行研究を踏まえて、本発表では本作品の時代設定である1900年辺りから本作品の初出年1931年のアメリカの堕胎が行われる状況と照らし合わし、Nancyの言動を読み直した。堕胎が違法であり堕胎を試みること自体が犯罪であった時代に、妊娠し堕胎を望む女性登場人物はFaulknerの他の作品でも見られるが、そのテキストでの望まない妊娠や堕胎の試みの表象の仕方も踏まえつつ、Nancyの妊娠に対して堕胎が意図された可能性を再検討した。そして、Quentinの視点から不安定な家族形態が語られることで、堕胎を巡り、女性が抱く恐怖だけでなく、存在を認められない子供がいるという子供にとっての恐怖を描いた作品として本作品を再読することが本発表の目的である。

＜第二日＞

11月30日（日）10時

SYMPOSIA

第一部門（岩木ホール）

オリジナルとアダプテーション

司会・講師	秋田高専講師	古　河　美喜子
講師	弘前大学講師	土　井　雅　之
講師	山形大学教授	中　村　　隆
講師	二葉栄養専門学校講師	吉　田　季実子

リンダ・ハッチオンは、アダプテーションとは「ひとつのコミュニケーションの体系から別の体系へコードが変換されるひとつの形態」であるとともに「時代を隔て、また異なる文化で実践されることにより違った機能をもちうる」ことを著書『アダプテーションの理論』中で示している。

本シンポジウムでは、シェイクスピア以降の作家たちについて、古典（ギリシャ、ラテン文学）から現代のサブカルチャーに至るまで、演劇・詩・小説・絵画を題材に、その影響関係やアダプテーション（翻案）について考えることで、それぞれの作家・作品における受容や展開を検証する。

オリジナルからアダプテーションへの移動・変化は、我々に多種多様なコンテクストを提示してくれる。「間テクスト性」、想像的力の可能性と限界なども考え併せながら、議論を深めたい。

プルタークの『英雄伝』とシェイクスピアのローマ史劇

土　井　雅　之

1590年代初頭に既にローマへの関心を示していたシェイクスピアは、その末葉からプルタークの『英雄伝』を材源に『ジュリアス・シーザー』、『アントニーとクレオパトラ』、『コリオレイナス』を書く。比較によって、プルタークの人物評を参考にしながら、劇作家が独自の人物造形に取り組んだことがわかるのはもちろんのことだが、『英雄伝』の中からシーザー、アントニー、コリオレイナスの3者を選択したことは、大きな視野からローマ史を捉え、歴史の転換点に悲劇的な末路を迎えた英雄たちに焦点を当てたことを示している。本報告では、エリザベス朝イングランドにおけるプルタークの受容を略説することから始め、ローマ史劇を中心としたシェイクスピアのローマ関連の作品群がどのような位置を占めるのかを確認する。次に、各作品におけるプルタークとシェイクスピアとの相違点に注目し、変更された出来事や人物像がどのような効果を劇全体にもたらすのかを考察する。

ヘリックと「カルペ・ディエム」の詩想

古　河　美喜子

17世紀の王党派詩人ロバート・ヘリックは、彼の詩集『ヘスペリディーズ』（1648）のタイトル自体がもともとはギリシャ神話に登場するヘスペリディーズ姉妹に由来し「地上の楽園」を示すものである

と共に代表作「乙女たちに 時間を大事にするように」のモチーフが古代ギリシャ・ローマの思想「カルペ・ディエム」であることなどから想起されるように、古典文学からの影響を受け、ギリシャ・ローマ時代を憧憬していた。本報告では、アナクレオンやホラティウスの系譜を引くこのヨーロッパの伝統的な主題・テーマが古今東西の詩文学の中でどのように翻案され広がっていったかについて、ヘリックを中心に紹介し考えたい。ヘリック詩の日本における受容については必ずしも明らかにされていないが、日本で大正期に吉井勇作詞・中山晋平作曲で流行した『ゴンドラの唄』の歌詞などはまさにこのカルペ・ディエムを引き継ぐものであり、そうした研究の手がかりにもなると思われる。

『オリヴァー・トウィスト』におけるホガース風の主題と変奏

中　村　　隆

ディケンズの死後「オリヴァーを創ったのは私だ」と叫び、晩節を汚したクルックシャンクであるが、そこに一抹の真実がなかったわけではない。たとえば、ディケンズ初期の『オリヴァー・トウィスト』はホガースの徒弟ものの影響を受けているが、その一つの遠因は、この小説の連載時に、絵師として盛名を馳せていたクルックシャンクが作家に「勤勉な徒弟」のプロットを提案したことによるのかもしれない。小説における自己の役目の能動性を弁ずるクルックシャンクの主張の是非はさておくとしても、「当代のホガース」をもって任じた稀代の絵師が、時に本文の枠を超えて、挿絵にホガース流の細工を巧みに織り込んだのは事実である。すなわち、絵師が作家の本文を翻案したのである。本報告では、本文がクルックシャンクの挿絵によってホガース風に書き換えられる過程を見る。のみならず、ディケンズのこの小説がホガース風の主題の見事な変奏であることを検証する。

宝塚歌劇におけるシェイクスピア上演の系譜

吉　田　季実子

執筆年代当時にシェイクスピア劇が男性キャストのみによって演じられていたというのは周知の事実で、言い換えるならばシェイクスピアの戯曲は単一のジェンダーによって、異性装を含む上演を前提に執筆されていたといっても過言ではないだろう。

本年創立100周年を迎えた宝塚歌劇団は団員を未婚女性にのみ限り、長い歴史と2000人以上を収容する2つの常打ち劇場を所有する、極めて特殊な演劇集団である。宝塚歌劇におけるシェイクスピア劇上演は創成期の大正年間にはじまり、本年も2つの翻案作品が上演される例にみられるように、100年の歴史の中で大きな位置を占めている。本報告では時系列的にシェイクスピア作品の上演の系譜をたどりながら、元戯曲の誕生時と鏡像的なジェンダー構成をもつこの劇団によるシェイクスピア作品の受容と発信の過去と現在について考察を行うことを目的とする。

第二部門（会議室2）

アメリカ史へ遡行するファンタジー：新たな読みの試み

司会・講師　福島大学教授　後藤史子
講師　東北学院大学非常勤講師　宮澤文雄
講師　流通経済大学講師　野口元康
講師　福島大学非常勤講師　渡邊真由美
講師　東北学院大学非常勤講師　星　かおり

テーマ解題

後藤史子

現代文化におけるファンタジーの隆盛は止まらない。この旬のテーマをめぐり我々が注目した批評が、Rosemary Jacksonの *Fantasy: The Literature of Subversion*（1981）だ。Jacksonはファンタジーを、妖精物語などの〈驚異〉の様式と、19世紀リアリズムに代表される〈ミメーシス〉の間に位置付け、両方の要素を併せ持つとした。Jacksonによれば、ファンタジーは、非現実と申し立てられたものをテキストに介入させてリアリズムの想定を覆し、「文化の語られないもの、見えないもの、沈黙させられているもの」を暴き出す。しかしJacksonはアメリカの作品をあまり取り上げず、本格的な政治的・歴史的なテキスト分析を行うに至っていない。もとより妖精物語の伝統をほとんど持たなかったアメリカ・ファンタジー文学は、歴史の中で国家や社会の諸課題と切り結び「正史」や「正論」に異議を申し立ててきた経緯があるのではないか。本シンポジウムは、世紀転換期以降現代までのSFやユートピアを含むファンタジー作品を取り上げ、戦争、消費文化、大国主義、奴隷制などに関わる国家的言説に対し、ファンタジーがその独自の方法や効果によって揺さぶりをかけてきた様相を振り返る。

『オズ』との邂逅――ボーム、ドライサー、フィッツジェラルド

宮澤文雄

Theodore Dreiser（1871-1945）が *Sister Carrie* を発表した1900年、Lyman Frank Baum（1856-1919）は少女ドロシーがオズの国という別世界に迷い込んで旅をするファンタジー、*The Wonderful Wizard of Oz* を上梓した。一方は自然主義、他方はファンタジーとジャンルこそ違うものの、二つの作品が同時期に誕生した点は注目に値する。それらの同時代性を示すものとして、例えばシカゴ万博の影響が濃厚なエメラルド・シティとシカゴやニューヨークの描写、また当時絶大な支持を集めた発明王トマス・エジソンがモデルと思しきキャラクターの創出などがある。この消費文化への傾斜という共通点がジャンル上の違いを越えて両者を接近させている。本発表ではまず『オズ』と『シスター・キャリー』がどのように世紀末アメリカを描いていたのかについて考察する。それからさらに『オズ』と関連性のある、それ以降の作品の事例としてF. Scott Fitzgerald（1896-1940）の *The Great Gatsby*（1925）を参考にしながら、アメリカ社会はいつの時代も『オズ』と邂逅していることを指摘し、『オズ』が秘める力を捉えてみたい。

月明かりと召使いのランプは何を照らすのか――南北戦争トラウマ表象としての幽霊

野　口　元　康

Ambrose Bierce（1842-?1914）は南北戦争に従軍し、戦後一定の期間を経てから（1880～1910年代）南北戦争に関連する短編や恐怖小説を執筆している。戦争終結からビアスが短編小説を執筆する間にアメリカ社会は飛躍的な発展を遂げる。例えば、大陸横断鉄道の開通、工業技術の発展、米西戦争など、この時代アメリカが覇権国家へと歩んでいく過程を辿ることができる。ビアスの短編執筆時期が、南北戦争から一定期間を経てアメリカ社会が急激に変化していく時期と符合することを考慮すると、ビアスの短編は南北戦争を忘却し前進し続けるアメリカにブレーキをかけようとしていたと解釈することが可能となる。本発表では、集団的トラウマとして忘却された南北戦争が作品の中で亡霊として回帰していると捉え、ビアスの短編「月明かりの道」（1907）を、南北戦争を忘却し前進しようとするアメリカに警鐘を鳴らす作品と解釈する。可能であれば、当時のスピリチュアリズムの動向も交えてビアスの短編と同時代の言説との関連性にも触れてみたい。

過去への旅――Jurgenは理想国家を見つけるのか

渡　邊　真由美

James Branch Cabellの*Jurgen: A Comedy of Justice*（1919）は、40代の質屋を営むJurgenが悪魔に味方したことで、異界へと入り込む物語である。若さを取り戻し、爵位を手に入れた彼は、悪魔によって捕らわれた妻を探して、異界を遍歴する。そこは、中世と思しき騎士の国、太陽の神の娘の王国、すべてのものの最上位の神などが存在する。他方、労働者の姿はなく、貴族か神である女性たちはジャーゲンの恋人や妻のいずれかでしかない。この作品が世に出た1910年代後半のアメリカ合衆国は、アジア系の移民の排斥を行った他方で、第一次世界大戦へ参戦し、世界の大国へ変貌した時期であった。そのことと、古代ギリシアや中世ヨーロッパを思わせる異界で、質屋のJurgenがあがめられる姿を合わせて考えると、作者をはじめとする（白人の）アメリカ人男性による、ヨーロッパに代わって、アメリカ合衆国を世界の一等国にしようとする意思があるように思える。Jurgenが求めるのは、誰のための、どのような国家なのか、タイトルにある正義とは誰にとってのものなのかを歴史をふまえて検証したい。

身体に纏わりつく過去の悪夢――Octavia ButlerのKindred（1979）における身体の表象

星　　かおり

自らの奴隷体験を語るslave narrativeの形式を踏襲しつつも、作家個人の創造力を駆使して奴隷制の物語を語るneo-slave narrativeというジャンルは、1960年代に始まったとされている。この時代は公民権運動の高まりにより、従来の白人中心的な歴史観、文学観に抵抗し、黒人の視点を取り入れた研究が盛んになった。その影響を受けたOctavia Butlerの*Kindred*（1979）もまた、neo-slave narrativeの流れに属している。

本論では、主人公Danaの身体が、未だなお癒えない奴隷制の記憶を伝える媒体として機能していることを明らかにする。Danaは1976年のN.Y.から1810年代の南部にタイムスリップしてしまい、過去の世界で奴隷として鞭を打たれる。その時の傷は現代に戻っても彼女の身体に刻まれたままである。そしてDanaが過去から帰還する最後のタイムスリップの際、彼女の祖先である白人のRufusに掴まれた左腕を失う。Danaの身体の傷は、奴隷制に関する現代の集団的記憶喪失に警鐘を鳴らすものであると考えられる。

また*Kindred*のファンタジー的な要素は、奴隷制の記憶を語る際にどのような効果があるのだろうか。ファンタジーとneo-slave narrativeの親和性の点から考察したい。

第三部門（会議室1）

文法から見た語用論・語用論から見た文法

司会・講師　群馬県立女子大学講師　志澤　剛
講師　筑波大学大学院　五十嵐啓太
講師　中京大学講師　三上　傑
講師　東北大学准教授　長野明子

語用論は、一般には「言語表現（発話文）とその使用者（話し手･聞き手）の関係」を研究する分野を指す。そのような一般定義に沿った「言語使用の意図とその解釈」に焦点を当てた従来の研究（Grice（1975), Horn（1984), Sperber and Wilson（1986), Brown and Levinson（1987), Carston（2002）など）に加え、最近では生成文法におけるカートグラフィー研究（Rizzi（1997, 2004）など）やHirose（2013）の「言語使用の三層モデル」を援用した研究（Ikarashi（2013), Nishida（2013), Shizawa（2013））など、語用論と文法形式（或いは文法知識）との関連に対する関心が一層高まりつつある。このような動向を踏まえ、本シンポジウムでは、志澤が英語の場所句倒置構文と日本語の対応文、五十嵐が英語の主語省略、三上が英語の場所句倒置構文、長野が博多方言の終助詞を取り上げ、各々の理論的立場から広義の「語用論と文法のインターフェイス」を扱う。一見バラバラに見える現象が語用論を窓口に緩やかに重なり合う様を覗き見ることで、オーディエンスの関心を喚起し、活発な議論につながることが期待される。

「場所句倒置構文」の日英対照研究：語順と状況把握のモード

志澤　剛

一般に、(1) のような英語の場所句倒置構文に対応する日本語表現は、(2) のような「XニハNPガVテイル」文であるとされている（Nakajima（2001), 小野（2005）他）。

(1)　On the wall hung a small mirror.

(2)　壁には小さな鏡が掛かっていた。

確かに、両者には生起する動詞の種類（出現・存在を表す非対格動詞）や、談話機能（提示）など共通点も多い。しかしながら、以下のように文法的に対照的な振る舞いを見せる場合もある。

(3) a.* On the wall <u>may</u> hang a small mirror.
　　b. 壁には小さな鏡が掛かっている<u>かもしれない</u>。

(4) a. “What did Mary say?” “* On the wall hung a small mirror.”
　　b. 「花子は何だって」「壁には小さな鏡が掛かっていたんだ<u>って</u>」

(5) a.* Did on the wall hang a small mirror?
　　b. 壁には小さな鏡が掛かっていた<u>のですか</u>。

英語の場所句倒置文は推論、伝聞から得られた情報を表すことや、疑問文にすることが出来ないのに対し、日本語の対応文はいずれも可能である。このような日英語の違いに対し、本発表は、「証拠性」、「状況把握のモード」をキーワードに接近する。

会話場面における英語の主語省略と対人機能

五十嵐　啓　太

英語の文法は、通常主語の省略を許さない（e.g. **Am here*）。しかし会話の場面で主語省略が起きる場合がある。

（1）　（I）Wouldn't blame her if she did leave him.　（Thrasher（1977: 28））

会話における主語省略が持つ対人的機能については、例えばThrasher（1977）が、聞き手との心的距離の近さを表す機能があることを指摘している。しかし、以下のような例は捉えることができない。

（2）　Went to your office to bring you lunch today.

この文は夫の浮気を疑った妻が怒って発話しているため、聞き手との親密さを表しているわけではない。このように主語省略が持つ対人機能はいまだに明らかにされていない面が多い。そこで本発表では、主語省略の機能として「発話時における話し手の思考を、聞き手に追体験させる」という一般化を提示する。当該形式は、伝達情報が話し手の発話時の思考に由来していることを表すため、主張の帰結として、主語省略を証拠性（evidentiality）に関わる現象として捉えなおす可能性が示唆される。

英語のA移動現象に見る統語と談話のインターフェイスの変遷：焦点卓越言語から主語卓越言語へ

三　上　　傑

いわゆる動詞第2位現象を示し、語順が比較的自由であったとされる古・中英語に比べ、現代英語ではSVOという固定された語順が確立され、主語は基本的に、その談話的機能にかかわらず、主語位置（TP指定部）へA移動を起こすと考えられている。本発表では、場所句倒置構文を取り上げ、その構文特性や派生を通時的に分析することを通して、英語における統語と談話のインターフェイス、とりわけ、A移動現象での統語システムへの談話的機能の関わり方について、その変遷を考察する。具体的には、Miyagawa（2010）により提案された素性継承のパラメータ化を伴う枠組みの下、焦点卓越言語であった古・中英語から主語卓越言語にパラメータ値が変化したのに伴い、焦点素性によって動機づけられたA移動の衰退と、ϕ素性を介したA移動の義務化が起こったという可能性を提示し、その妥当性と理論的含意を検討する。

日英語における語用論と形態論の相関：博多方言の終助詞「たい」と「ばい」に基づく考察

長　野　明　子

標準日本語は、英語と違い、言語使用の状況把握層と状況報告層を形態的に区別する（(1) vs. (2)）。また、状況報告での「共有情報の確認」と「情報共有の確立」の区別を終助詞で標示する（(2b)）。

（1）　Today is Saturday.

（2）a.　状況把握　　今日は土曜日だ

　　b.　状況報告　　今日は土曜日だ｛ね（共有情報の確認）／よ（情報共有の確立）｝

博多方言では、状況報告（(3b)）で「たい」と「ばい」がそれぞれ「ね」「よ」と同じ区別をする一方、「たい」は状況把握にも使われる点（(3a)）で英語と同じ標示パターンを示す。

(3) a. 状況把握　今日は土曜日たい

b. 状況報告　今日は土曜日 {たい（共有情報の確認）／ばい（情報共有の確立）}

Hirose (2013) や Ikarashi (2013) は、①言語使用層に関する形態的区別の有無と、②情報共有性に関する形態的区別の有無は、同一言語内で平行的であると示唆するが、(3) から①と②は交差することがあるとわかる。本発表では (1)–(3) を、言語使用に関する形態パラダイムの違い（屈折形の分布の仕方の違い）として分析する。

大会会場（弘前大学50周年記念会館）へのアクセス

【文京町地区へのアクセス】

1. JR弘前駅から

○徒歩の場合（約20分）

○バスを利用する場合（約15分）

・JR弘前駅前（中央口）【3番のりば】から「小栗山・狼森線」又は「学園町線」に乗車し、【弘前大学前】又は【弘大農学生命科学部前】下車

○タクシーを利用する場合（約5分）

2. 弘前バスターミナルから

○徒歩の場合（約20分）

○バスを利用する場合（約15分）

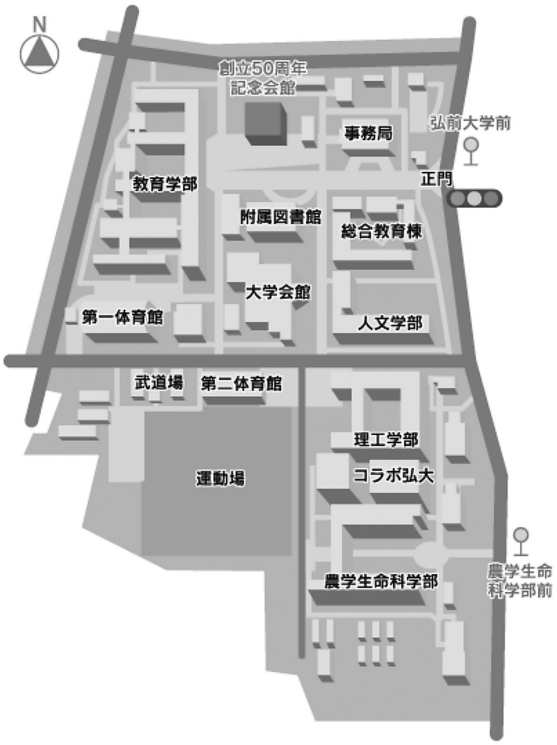
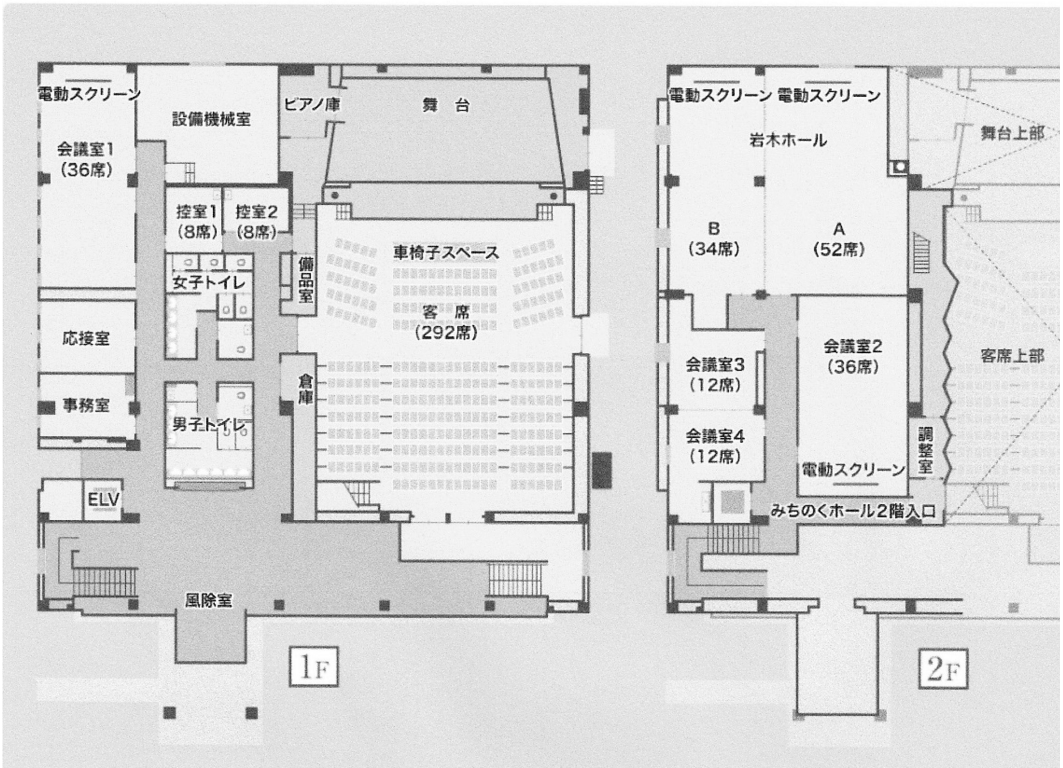
・【バスターミナル前のりば】「小栗山・狼森線」又は「学園町線」に乗車し、【弘前大学前】又は【弘大農学生命科学部前】下車

○タクシーを利用する場合（約5分）

3. 弘南鉄道

○弘高下駅で下車し、徒歩の場合（約5分）

○弘前学院大前駅で下車し、徒歩の場合（約7分）



50周年記念会館フロアガイド